

# いのちを支えて

## 県内緩和ケアの現場から

□□2

七十代から脳梗塞を繰り返して、肺がんを併発した女性(八四)は、新潟市江南区は、病気に伴う被害妄想から暴言を吐き、暴れる「せん妄」という錯乱状態になった。三月下旬、対処できなくなった病院が紹介した先が、二年前に新築したばかりの白根大通病院ホスピス。同南区に、緩和ケア専門の病棟があった。

**すみか**  
居場所 求めて

## 言葉の重み

# 心の痛みにも応えて

## 「見放さない」「思い患者に

本間英之医師(三九)は、大学医局からの派遣で延べ十二病院を回った。十年余りで数多くの手術をこなしてきた。せん妄の症状はなくなった。

中越地方の病院勤務で転機が訪れた。執刀で息子の男性(五〇)が「具合は？」と聞くと、見つかったのだ。短期



看護師と打ち合わせる本間医師(中央)。患者に合ったケアかどうかを毎日チェックする。新潟市江南区の白根大通病院ホスピス

穩やかに「まあまあ」との答えが返るようになった。「こんなに落ち着くなんて、想像もしなかった」と男性。「家族みんな、ゆったりとした気持ちで最後のお別れをさせてもらっている」と母親の手をさすった。

間て病院を転々としていただけに、術後の容体などには無頓着だった。「再発は一定の割合で必ずある。仕方ない」と言い聞かせたが、シヨックだった。

患者が苦しむ姿は外科病棟でも見ている。モルヒネなどの医療用

麻薬は投与したが、当時は「見よう見まねの目分量」。治療手段がない患者への無力感にさいなまれた。

「優秀な外科医はほかにも大勢いる。診る人が少ない終末期医療をやるう」。一大決心をして飛び込んだ緩和

ケアの現場で、「コミの場面は増えた。失敗談もある。治療に疲れ切った患者をい

さままだ。二十四歳で「先生」と呼ばれ、病棟を駆け回った外科医時代とは比較にならないほど、会話や説明

ホスピスでは、延命を目的とした積極的な治療はしない。がんの痛みや不快症状をなくす対応はするが、容体次第では一本の点滴さえ「害」になる。薬がいつも効くとは限らない。身体的なつらさ以上に「自分はなぜ生まれ、死んでいかなければならないのか」と、心の痛みを抱える患者も多い。

ね」と言つべきだったんだ」と悔やんだ。家族に頼まれ、「もうすぐ、お父さんとお別れしなくちゃいけないかもしれないよ」と幼い子に告知した経験もある。自ら三人の子がいるだけに、同世代の最期は「とりわけ切ない」と目を伏せる。

本間医師は「僕も人間、だから万能ではない。でも『最後まで見放さない』と彼らにメッセージを送り続けたい」と誓っている。